

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑩

長短自在の命

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第31回、32回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第31回では、「第十六願」について、第32回では、「第十七願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第30回からその一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 長短自在の命

本願の第十五願は、「たとい我、仏を得んに、国の中の人天、寿命能く限量なけん。その本願、修短自在ならんをば除く。もし爾らずんば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』17頁、東本願寺出版部〈以下、『聖典』と略記〉）と。阿弥陀如来が仏に成るなら、その国の中の衆生はみんな寿命が無限であるのだと、こういう願を立てた。ところが、その後ろに「その本願、修短自在ならんをば除く」と。「修」は、おさめるという意味もありますが、長いという意味がある。だから、「修短」は長短ということです。ここの「本願」は、この場合は、一応は、浄土に生まれた人天の本願です。浄土に触れた衆生の根本の願い。その本願において、長かったり短かったり自在であるというものは除くと。

除くといわれると、修短自在でない存在もあるのかとも思うのですが、どうもそうではない。みんな修短自在を与えられる。だから、「除」といっても排除という意味ではないので

す。そうではなくて、除というのは、何かそこで存在の自覚に目覚めて、自らが自分で選んで立ち上がる。そういう意味がある。つまり、おもしろいなと思うのですが、無限に生きてもよいよという世界は、実は、どんな短い命でも、無限の意味があるということでもある。われわれのこの有限の命の中だと、比較対して、少しでも長いほうがよいという、そういう考えなのですが、無限大の浄土の中では、自由自在である。つまり、修短自在ということは、人生の長い短いの問題ではないよということ、どこかで言い当てているのではないかと思います。だから、第十五願は、浄土を建立して衆生を招き入れるのだけれど、浄土に触れるということは、みんな浄土を離れて、短い人生で自由にできるということでもあるわけです。

浄土に往かなければたすからない。無限な命が欲しいから、浄土に往きたいというのだけれど、往ってみたら、あなたはもう無限の命をもらったのだから、自由に、自分の命を短くしてよい。自由に出て行ってくださいと言われて、わかった、出て行きますと言って出て行けるのが、第十五願である。おもしろい話だと思いますね。

■ 一念の歩み

つまり、有限な努力ということ言えば、時間は無限大に必要なことになる。けれど、無限大の願心が衆生にはたらきかけたいということになれば、本当は、われわれの時間の中にはおさめきれないようなはたらきが、一瞬にして来る。譬喩で言うと、ものすごい速さで走っている短距離

走をしている人を、早いシャッターで、ぱっと撮ると、止まったごとくに見える。止まったごとくに見えるけれども、本当はものすごいスピードで走っている一コマである。そのように、われわれの時間の中に、無限大の時間をかけるような課題が切り取られて、一瞬にして与えられる。

ちょっとわれわれには、それは信じ難いのです。やっぱり時間をかけてやらなければいけないのではないかと。よいですよ、やってください。無限にかかりますよ。でも、そうではない道もあるのだと。有限から無限に行くのではない、無限が有限に来る。だから、「修短自在」ということは、浄土に触れたら、極端に言えば、一瞬でよいということです。無量の寿命がある世界にも触れるなら、一念一念の中に、無量の寿命の意味が来る。長く引き延ばして無限になるのではない。そういうものに触れないと、何か、われわれの人生は、いくら生きても、何年生きても足りないと思えないわけです。

凡夫が、少し訂正して仏に成っていくと考えると、自力になるわけです。それで凡夫でよいのだと開き直ったら外道に墮するわけです。念仏ということは、念仏の一念に無限大の功德が来る。では、一声でよいのかといたら、いや、一声でよいとはいわない。縁のある限り称えなさいと。無限の功德が来るのなら、無限を二倍しても三倍しても功德は同じでないか。いや、その時その時が勝負なのだ。その時、その時に、全部が来ることを生きる。だから、一念に全部がありながら、一念が歩む。一念が終わらない。

■ 念仏はいつでも出直し

私は、頑固で、愚かで、愚かなくせに何か理屈ばかりこねているところがあるのですが、でも、こうやって長い間本願の教えを聞いていますと、有限な人間の自我がらみ、我執がらみの、自力がらみのものの見方、有限の自我を立てて、自我でどこまでも行けるという発想は間違っている、どこかで、それは本当は駄目

なのだと思える。これは、本当に不思議なことだと思います。そうすると、南無阿彌陀仏の一念に無上功德を感じるといふ力が来るのです。いや、俺は無限の時間がかかってもやる、七度生まれ変わってもやるなどと頑張っているうちは、この功德に遇うことはできない。そういうことではないかと思うのです。

自由自在ですよ。浄土の命に触れるということは、短いも長いも、どちらでもよい。無限なる光に帰ると、そこにもう無限に歩むということがあるわけです。一念一念、愚かな身において、無限の功德をいただいていく。「歩む」というと、だんだんよくなるのかというと、一向に変わらない愚かな身を歩むわけです。

もう何年前ですけど、念仏好きの開法者がいて、その方と同席したときに、その人が私に、おまえは駄目だな、出直してこいと。はい、わかりました、出直しますと。いつでも出直しなんです、念仏というのは。だんだん立派になるのではないのです。それでは、何のために称えるのかというようなものですけども、何のために、「ために」が無くなるのが念仏です。一念に無限の功德をいただく。それが、菩薩道がここに成就するということである。そういうことが、この第十五願が暗示している問題ではないかと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2010年6月 9日(水)午後6時30分～9時
7月 1日(木)午後6時30分～9時
8月20日(金)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>